

名古屋大学によるアフリカ考古遺跡の調査記録： 大参義一教授の写真スライド資料

Records of archaeological fieldwork in Africa by Nagoya University:
Prof. Omi Giichi's collection of photographic slides

門脇 誠二 (KADOWAKI, Seiji)

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学博物館

Nagoya University Museum, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, 464-8601, Japan

1. はじめに

名古屋大学では半世紀以上にわたって、アフリカ大陸におけるフィールド調査に基づく研究が行われてきた。その内容は、第12回名古屋大学博物館特別展「大陸アフリカー名大の研究軌跡」において、「地質と資源」「民族と文化」「環境と農業」の3項目に分けて紹介された(吉田ほか, 2009)。また、考古遺跡の調査については第18回名古屋大学博物館特別展「人類史上画期的な石器—名大のアフリカ考古学と南山大の旧石器コレクション」において紹介され、その概要が関連図書に記されている(門脇, 2014)。その中で、アフリカの考古遺跡の写真を幾つか掲載したが、本稿はこの写真資料の全体像について報告し、今後の利用促進を図る。

本資料は、マウントされたスライドフィルムのコレクションで、故・大参義一氏(信州大学教授・愛知学院大学教授)による撮影記録である。大参義一教授(1927年~1996年)は、名古屋大学文学部史学科卒業で、1963年~1981年には名古屋大学文学部考古学研究室に助手として在籍し、アフリカの考古学調査を開始した。この調査は、1968年に理学部教員を主体とする「名古屋大学アフリカ大地溝帯学術調査団(NUARVE: Nagoya University African Rift Valley Expedition)」の一環として開始されたが、1975年には「名古屋大学東アフリカ考古学調査隊(NUEAPR: Nagoya University East African Archaeological Prehistoric Research)」として独立した。この考古調査は大参氏が1981年に信州大学へ異動した後も継続し、1989年まで合計9回にわたって実施された(表1)。大参氏はアフリカだけでなく、愛知県や岐阜県を中心とした地域の縄文~古墳時代の研究にも多くの業績を残されたが(波多野, 1996)、本稿はスライド資料に関連するアフリカ調査に焦点を絞る。

このスライド資料一式は、大参氏のアフリカ調査隊メンバーであった加藤安信氏(元大同大学大同高等学校校長)と川合剛氏(名古屋市博物館学芸課学芸員)を通して名古屋大学博物館へ2011年に寄贈された。両者からはその後の資料整理や関連文献についても協力をいただいた。本資料の受領を足立守氏(名古屋大学特任教授)と筆者が行い、その後、筆者が資料整理を進めた。

2. 写真スライド

アフリカの遺跡調査の様子などが撮影されたカラー写真スライド(35 mmサイズ)が、51冊のファイルにまとめられている。それを登録するにあたり付与した番号が、NUM-Lg01-1~51である。“NUM”はNagoya University Museumの略号で、“Lg01”がこの写真スライド資料の番号、そして51冊のファ

表1. 大参義一氏によるアフリカの考古学調査.

調査年	調査名	主な調査地	日本人調査隊員 (五十音順, 敬称略)	報告
1968	名古屋大学アフリカ大地溝帯学術調査 (NUARVE: Nagoya University African Rift Valley Expedition)	タンザニア, ケニア	青木治三, 大参義一, 栗本秀彦, 志井田 功, 諏訪兼位, 松沢 勲, 水谷伸治郎, 宮川邦彦, 矢入憲二	Omi, 1969
1975	名古屋大学東アフリカ考古学調査 (NUEAPR: Nagoya University East African Archaeological Prehistoric Research)	ケニア, ウガンダ (ムウエア北遺跡と ルバ遺跡)	安達厚三, 伊藤秋男, 大参義一, 嘉藤良次郎	Omi, 1977; 大参, 1976, 1984
1978-79	名古屋大学東アフリカ考古学調査 (NUEAPR: Nagoya University East African Archaeological Prehistoric Research)	ウガンダ (ムウエア北遺跡とルバ遺 跡), ケニア (ムトングウェ遺跡)	赤澤 威, 安達厚三, 大参義一, 梶田澄雄, 加藤安信	Omi, 1980; 大参, 1984
1980	名古屋大学東アフリカ考古学調査 (NUEAPR: Nagoya University East African Archaeological Prehistoric Research)	ケニア (ムトングウェ遺跡), タンザ ニア	大参義一, 加藤安信, 嘉藤良次郎, 河瀬正利, 高山 博	Omi, 1982; 大参, 1981
1982	アフリカ東部と東北部の先史研究 (East and Northeast African Prehistory Research Project)	ケニア (ムトングウェ遺跡), エチオ ピア	江原昭善, 大参義一, 梶田澄雄, 加藤安信, 川越哲志	Omi, 1984
1984	アフリカ東部と東北部の先史研究 (East and Northeast African Prehistory Research Project)	ケニア (ムトングウェ遺跡)	稲田孝司, 大参義一, 梶田澄雄, 佐々木 明, 高山 博	Omi, 1986
1986	アフリカ東部と東北部の先史研究 (East and Northeast African Prehistory Research Project)	ケニア (ムトングウェ遺跡, ヌグタツ 遺跡), タンザニア (ムゴンガ・マコ ロンゴニ遺跡)	大参義一, 加藤安信, 酒井潤一, 佐々木明, 中村由克, 松本建速, 安川豊史	Omi, 1988
1988	アフリカ東部と東北部の先史研究 (East and Northeast African Prehistory Research Project)	ケニア (ムトングウェ遺跡, ヌグタツ 遺跡)	大金タダシ, 大参義一, 織笠 昭, 酒井潤一, 佐々木 明, 山本 誠	Omi, 1991; 大参, 1991, 1992
1989	アフリカ東部と東北部の先史研究 (East and Northeast African Prehistory Research Project)	ケニア (ムトングウェ遺跡, ヌグタツ 遺跡), タンザニア (ムゴンガ・マコ ロンゴニ遺跡)	稲田孝司, 大参義一, 岡田昭明, 川合 剛, 佐々木 明, 友田哲弘, 森 忍	

イルそれぞれに個別番号 (1~51) をつけた。この登録番号を以下の報告において引用する (NUMは省略する)。それぞれのファイルには表2のようなタイトルあるいは番号が記されている。その中の“NUARVE”と“NUEAPR”は先述した調査プロジェクトの略称である。“SUAPR”はShinshu University African Prehistory Research (信州大学アフリカ先史研究)の略称と思われる (大参氏が1981年に信州大学へ異動したため)。それに続く数字 (1968や78など) は、調査年を示しており、大参氏によるアフリカ調査の履歴と符合する。このように、調査シーズンごとに整理された写真スライドがほとんどであるが、その一部が抜粋され、講義で使用するためのためにまとめられたファイルが3冊ある (登録番号Lg01-47~49)。それ以外に、日本 (主に愛知・岐阜・長野県) の遺跡や景観の写真スライドを含むファイルが2冊ある (登録番号Lg01-50, 51)。

それぞれのファイルには、67枚~246枚のスライドが収納されており、合計7935枚のスライドがある (表2)。その約半数には、マウント部分に撮影日時や撮影場所、撮影対象を示す注記が書かれている。それを参照すると、それぞれのファイルには、ファイル名が示す調査年に撮影されたスライドが収納されている。例外として、1968年調査の第11巻 (Lg01-12) と第13巻 (Lg01-14) のフォルダーに、1970年~86年に撮影されたスライドが29枚混じっている。

撮影対象は、調査で訪れた地域の景観が多く、その中に考古遺跡や国立公園が含まれている。遺跡調査の記録としては、発掘・測量の様子や石器の出土状況、土層断面の写真のほか、発掘隊員の集合写真もある。また、発掘された石器資料や博物館収蔵の石器の記録写真も多い。

表2. 大参義一氏の写真スライド資料（ファイルごとに概要を示す）.

登録番号	ファイル名あるいは番号	スライド枚数	プロジェクト	撮影年	主な撮影地			調査内容
					地域名	遺跡（主な時代）や博物館	国名	
Lg01-1	NUARVE 1968. 1: Title, Map, Tokyo ~ Bombay, Nairobi, Naivasha, Nakuru, Hyrax Hill	95	NUARVE	1968	ファイル名の場所	Hyrax Hill (Neolithic)	ケニア	踏査
Lg01-2	NUARVE 1968. 2: Kariandusi, Gamble's Cave, Ologesailie, Nairobi Park	105			ファイル名の場所	Kariandusi, (ESA), Ologesailie (ESA)	ケニア	踏査
Lg01-3	NUARVE 1968. 3: Dar es Salaam, Village Museum	112			ファイル名の場所		タンザニア	踏査
Lg01-4	NUARVE 1968. 4: Williamson Mine, Safari, Dodoma, Morogoro ~ Iringa ~ Mbeya	95			ファイル名の場所		タンザニア	踏査
Lg01-5	NUARVE 1968. 5: Kondoa	154			ファイル名の場所	Kondoa (MSA ~ Iron Age)	タンザニア	踏査
Lg01-6	NUARVE 1968. 6: Kigoma (1)	115			ファイル名の場所および Katabe		タンザニア	踏査
Lg01-7	NUARVE 1968. 7: Kigoma (2), Kasimbo	131			ファイル名の場所		タンザニア	踏査
Lg01-8	NUARVE 1968. 8-1: Mbeya (1)	100			ファイル名の場所および Lake Malawa		タンザニア	踏査
Lg01-9	NUARVE 1968. 8-2: Mbeya (2)	148			ファイル名の場所および Isimila site	Isimira (ESA)	タンザニア	踏査
Lg01-10	NUARVE 1968. 9: Iringa, Isimira	118			ファイル名の場所	Isimira (ESA)	タンザニア	踏査
Lg01-11	NUARVE 1968. 10: Mgonga, Ngorongoro	166			ファイル名の場所	Mgonga (ESA)	タンザニア	踏査
Lg01-12	NUARVE 1968. 11: Olduvai	107			ファイル名の場所および Kondoa	Olduvai (ESA), Kondoa (MSA ~ Iron Age)	タンザニア	踏査
Lg01-13	NUARVE 1968. 12: Manyara, Arusha, Moshi, Tanga	67			ファイル名の場所および Massai land, Lake Manyara		タンザニア	踏査
Lg01-14	NUARVE 1968. 13: Cai r o, Memphis, Sakkara, Rwanda, Burundi	117			ファイル名の場所		エジプト	踏査
Lg01-15	NUEAPR. No. 1-6	194	NUEAPR	1975	右記の遺跡以外は Lake Nakuru, Mzima Spring	Ologesailie (ESA), Crescent Island, Hyrax Hill (Neolithic), Kilombe (ESA), Prospect Farm (MSA), Prolong Strip	ケニア	踏査
Lg01-16	NUEAPR. No. 8-12	149			右記の遺跡以外は Tsavo National Park, Mombasa	Fort Jesus, Jumba la Mtwana, Mtongwe (ESA, MSA, LSA)	ケニア	踏査
Lg01-17	NUEAPR. No. 13-17	110			右記の遺跡以外は Amboseli National Park	Fort Jesus Museum, Gedi Ruins	ケニア	踏査
Lg01-18	NUEAPR. No. 18-22	158			右記の遺跡	Koobi Fora (ESA), Nairobi Museum とその石器資料	ケニア	踏査
Lg01-19	NUEAPR. No. 23-27	168			Kasubi Tombs, Namirembe Cathedral, Kibuli Mosque, The Source of the Nile, Bujagali Falls, Owen Falls Dam	Nairobi Museum の石器資料, Kasubi Tombs	Nairobi Museum (ケニア) 以外はウガンダ	踏査
Lg01-20	NUEAPR. No. 28-32	155			右記の遺跡以外は Kagera River, Kazinga Channel, Rwenzori National Park, Kafu River	Uganda Museum とその石器資料, Bweyore Capital, Nsongezi Rock Shelter (LSA), Kainengasi Hill (ESA or MSA), Kantsyore Island (LSA), Gayaza, Mweya North (ESA), Kazinga, Kabalega's Tombs, Kafu River (ESA)	ウガンダ	踏査
Lg01-21	NUEAPR. No. 33-37	146			右記の遺跡以外は Moroto, Kampala, Nairobi	Kakoro Rock-paintings, Nyero Rock-paintings (LSA)	Nairobi (ケニア) 以外はウガンダ	踏査
Lg01-22	NUEAPR. 1975, Fort Jesus, Jumba la Mtwana と陶磁器	92			右記の博物館	Fort Jesus Museum の陶磁器資料	ケニア	踏査
Lg01-23	NUEAPR 78. I	153			右記の遺跡以外は Kidepo	Rupa (MSA, LSA)	ウガンダ	発掘
Lg01-24	NUEAPR 78. II	135			右記の遺跡以外は Kidepo	Rupa (MSA, LSA), Mweya North (ESA)	ウガンダ	発掘
Lg01-25	NUEAPR 78. III	136		Mweya North (ESA) とその石器資料	ウガンダ	発掘		
Lg01-26	NUEAPR 78. IV	141		Mweya North (ESA) の石器資料	ウガンダ	発掘		
Lg01-27	NUEAPR 78. V	223		Mweya North (ESA), Mtongwe (ESA, MSA, LSA)	ウガンダとケニア	発掘		

表2. (つづき)

登録番号	ファイル名あるいは番号	スライド枚数	プロジェクト	撮影年	主な撮影地			調査内容	
					地域名	遺跡 (主な時代) や博物館	国名		
Lg01-28	1978年ウガンダにて赤沢撮影資料, 津戸遺跡, マチャコス諏訪隊資料, ビテカントロプス関係	136	NUEAPR	1978		津戸遺跡 (日本)	ウガンダ, 日本		
Lg01-29	NUEAPR 80. I	182		1980		Mtongwe (ESA, MSA, LSA), Jumba la Mtwana	ケニア	発掘	
Lg01-30	NUEAPR 80. II	182				Mtongwe (ESA, MSA, LSA) とその石器資料	ケニア	発掘	
Lg01-31	NUEAPR 80. III	183				Mtongwe (ESA, MSA, LSA) の石器資料	ケニア	発掘	
Lg01-32	NUEAPR 80. IV	186				Mtongwe (ESA, MSA, LSA) の石器資料, Mgonga? (ESA) の石器資料	ケニアとタンザニア	発掘 (Mtongwe), 踏査 (Mgonga)	
Lg01-33	NUEAPR 80. V	130				右記の遺跡以外は Nairobi	Mtongwe (ESA, MSA, LSA) およびMgonga? (ESA) とその石器資料	ケニアとタンザニア	発掘 (Mtongwe), 踏査 (Mgonga)
Lg01-34	SUAPR 82. I	246	East and Northeast African Prehistory Research	1982		Olorgesailie (ESA), Mtongwe (ESA, MSA, LSA) とその石器資料	ケニア	発掘 (Mtongwe), 見学 (Olorgesailie)	
Lg01-35	SUAPR 82. II	213				Mtongwe (ESA, MSA, LSA) の石器資料, Melka Kontoure (ESA)	ケニア (Mtongwe), エチオピア (Melka Kontoure)	発掘 (Mtongwe), 見学 (Melka Kontoure)	
Lg01-36	SUAPR 84. I	243		1984		Mtongwe (ESA, MSA, LSA) とその石器資料	ケニア	発掘	
Lg01-37	SUAPR 84. II	227				Mtongwe (ESA, MSA, LSA) とその石器資料	ケニア	発掘	
Lg01-38	86-1: Kenya (No. 1~No. 5)	194		1986		右記の遺跡以外は Lake Magadi, Fourteen Falls	Olorgesailie (ESA), Mtongwe (ESA, MSA, LSA)	ケニア	発掘 (Mtongwe), 見学 (Olorgesailie)
Lg01-39	86-2: Kenya (No. 6~No. 10)	167				Mtongwe (ESA, MSA, LSA), Mipirani (MSA), Maganda (MSA?)	ケニア	発掘 (Mtongwe), 踏査 (その他の遺跡)	
Lg01-40	86-3: Kenya (No. 11~No. 15)	182				Mtongwe (ESA, MSA, LSA), Ngutatu (MSA, LSA), Mipirani (MSA) の石器資料	ケニア	発掘 (Mtongwe), 踏査 (その他の遺跡)	
Lg01-41	86-4: Kenya (No. 16~No. 20)	174				Mtongwe (ESA, MSA, LSA) の石器資料, Village Museum	ケニア	発掘	
Lg01-42	86-5: Kenya (No. 21~No. 22), Tanzania (1/2) 23, 24, 25	181				Mtongwe (ESA, MSA, LSA) の石器資料, Kariandusi (ESA), Mgonga (ESA) とその石器資料	ケニア (Mtongwe と Kariandusi), タンザニア (Mgonga)	発掘 (Mtongwe), 踏査 (Mgonga), 見学 (Kariandusi)	
Lg01-43	86-6: タンザニア (2/2) 26~	238				Mgonga (ESA) とその石器資料, Isimila (ESA)	タンザニア	踏査 (Mgonga), 見学 (Isimila)	
Lg01-44	SUAPR 88	187		1988	右記の遺跡以外は Tsavo West National Park	Mtongwe (ESA, MSA, LSA), Ngutatu (MSA, LSA), Mipirani (MSA), Kigato (MSA), Mabanda ya Gombe (MSA) と石器資料	ケニア	発掘 (Mtongwe), 踏査 (その他の遺跡)	
Lg01-45	SUAPR 89. 1	183		1989		Olorgesailie (ESA), Kariandusi (ESA), Mtongwe (ESA, MSA, LSA), Ngutatu (MSA, LSA), Mipirani (MSA), Mabanda ya Gombe (MSA) と石器資料	ケニア	発掘 (Mtongwe), 見学 (Olorgesailie と Kariandusi), 踏査 (その他の遺跡)	
Lg01-46	SUAPR 89. 2: アフリカ遺物, 民芸品	208				Mtongwe (ESA, MSA, LSA), Mipirani (MSA), Miritini (MSA) の石器資料	ケニア	発掘 (Mtongwe), 踏査 (その他の遺跡)	
Lg01-47	アフリカ考古学 講義用	156				アフリカ調査からの抜粋 (1968年と1975年からのが多い)			
Lg01-48	アフリカ スライド選(2)	127			アフリカ調査からの抜粋 (1968年と1975年からのが多い)				
Lg01-49	アフリカ スライド選(3)	158			アフリカ調査からの抜粋 (1968年と1975年からのが多い)				
Lg01-50	藤田隆寺, 野村兎義藏品, 堀井典男氏藏品, 桜本町遺跡, 伊場遺跡, 見付学校, 磐田原古墳群, 中道遺跡, 下呂町博物館, 吉田富夫氏藏品, 芥見一本松遺跡, 飛鳥水道遺跡, 南宮神社経塚, 絵野遺跡, 大府吉田古窯	139		1969, 1972, 1973	ファイル名の地域や遺跡, 遺物				
Lg01-51	日本: 栃原, 安雲野, 御岳, 岡山旅行, 野辺山, 美ヶ原, 愛知(高播遺跡, 呼俵小遺跡)	123		1980, 1982	ファイル名の地域や遺跡				

3. スライドに見る 9 回のアフリカ調査

写真スライドは調査シーズンごとにまとめられているので、写真を通して調査の様子をうかがい知ることができる。その概要を以下に紹介する。その際、説明する遺跡などの写真が含まれているファイルの登録番号（例えばLg01-01）を引用する。また、遺跡名や研究者名、アフリカの石器文化や時代名称については、初出時のみ英語表記を併記する。

3.1. タンザニアとケニアでの遺跡踏査—1968年

1968年調査の写真スライドは14冊のファイル（登録番号Lg01-1～14）にまとめられている。調査地はケニアとタンザニアである（特に後者が多い）。アフリカへの渡航と日本への帰国の際に経由したベトナムやインド、エジプトの写真もある（Lg01-1とLg01-14）。

この調査は、「名古屋大学アフリカ大地溝帯学術調査団（NUARVE）」という地球科学的テーマの調査に参加する形で行われたため、訪問された考古遺跡の数は多くない。しかし、その中にはアフリカ初期人類化石の代表的な調査地であるオールドヴァイ（Olduvai：図1u）をはじめ、前期石器時代（Earlier Stone Age, ESA）のアシュール文化（Acheulean）の遺跡として著名なカリアンドウシ（Kariandusi：図1i）やオロルゲサイリエ（Olorgesailie：図1n），イシミラ（Isimira：図1x）が含まれる。オールドヴァイ



図1.

大参氏によるアフリカ調査の訪問地（写真記録に残る主な場所を表示）。

現在の都市名はイタリック、考古遺跡名は次の記号で表示。

- a：メルカ・クントゥレ遺跡,
- b：クービ・フォラ遺跡,
- c：ルバ遺跡,
- d：カフ川流域,
- e：カコロ岩絵遺跡,
- f：ニエロ岩絵遺跡,
- g：キロンベ遺跡,
- h：ハイラックス・ヒル遺跡,
- i：カリアンドウシ遺跡,
- j：プロスペクト・ファーム遺跡,
- k：クレッセンド・アイランド遺跡,
- l：ムウェア北遺跡,
- m：ヌソンゲジ岩陰遺跡,
- n：オロルゲサイリエ遺跡,
- o：ゲデイ遺跡,
- p：ジュンバ・ラ・ムトゥワナ遺跡,
- q：ムトングウェ遺跡,
- r：スグタツ遺跡,
- s：ミピラニ遺跡,
- t：キガト遺跡,
- u：オールドヴァイ遺跡,
- v：コンドア遺跡,
- w：ムゴンガ遺跡,
- x：イシミラ遺跡,
- y：マバンダ・ヤ・ゴンベ.

この内、発掘調査された遺跡は○で表示。



図2. 名古屋大学アフリカ大地溝帯調査団が1968年にタンザニアで地質・考古学調査を行った際に訪れたオルドヴァイ渓谷（アフリカ石器時代の代表的調査地）。塔（tower）と呼ばれるビュートが前景に見える（Lg01-12収納の写真）。



図3. 名古屋大学アフリカ大地溝帯調査団に考古学者として参加した大参義一氏とアフリカ石器時代研究の先駆者の一人であるメアリー・リーキー氏。1968年オルドヴァイ渓谷にて（Lg01-12収納の写真）。



図4. 前期石器時代のイシミラ遺跡。数十万年前の原人が残した石器が足の踏み場もないほど多く散布している（Lg01-10収納の写真）。



図5. 世界遺産にも登録されているコンドアの岩壁画（タンザニア）。150以上の岩陰に数千年にわたって岩絵が描かれてきた。1968年に名古屋大学が踏査した（Lg01-48収納の写真）。

では（Lg01-12）、その景観を代表する「塔（tower）」と呼ばれるビュートなどが撮影されている（図2）。また、当地の遺跡調査を長年続けた英国の古人類学者のメアリー・リーキー（Mary Leakey）氏と大参氏と一緒に写る写真がある（図3）。リーキー氏による調査中だったと思われ、発掘作業の様子も撮影されている。リーキー氏らによって調査された遺跡は、その一部が現地に保存展示されており、石器や動物骨の出土状況も写されている。

遺跡現場の保存展示は、カリアンドウシ遺跡とオロルゲサイリエ遺跡（Lg01-2）そしてイシミラ遺跡（Lg01-9とLg01-10）でも撮影されており、ハンドアックスやクリーヴァーと呼ばれる大型の両面加工石器がたくさん散布する状況がよく分かる（図1i,n,x, 図4）。同じくアシュール文化の遺跡として、ムゴンガ（Mgonga：図1w：Omi, 1988の報告書ではMgonga-Makorongoniと呼ばれる）の写真もある（Lg01-11）。この遺跡は、オルドヴァイなどのように広く知られているわけではないため貴重な記録である。遺跡の景観や石器の散布状況の他、採取された石器の写真も含まれている。この遺跡は、後の1986年にも再調査されている（Lg01-42とLg01-43）。

より後の時代の遺跡としてはコンドア（Kondoa：図1v）が訪問されている。この遺跡は後期石器時代（Later Stone Age, LSA）以降に描かれた岩絵が有名で、2006年には世界遺産に登録された。大参氏らによる訪問の際にもたくさんの岩絵が撮影されている（Lg01-5がメインでLg01-12にも一部ある）（図5）。

3.2. ケニアとウガンダでの遺跡踏査—1975年

1975年調査（7月～9月）の写真スライドは8冊（登録番号Lg01-15～Lg01-22）にまとめられている。大参氏がそれぞれのファイルにつけた番号（例えばLg01-15のファイルには「No. 1-6」と記載）は、当時のフィルム番号だと思われる。1975年の調査は「名古屋大学東アフリカ考古学調査隊（NUEAPR）」と名づけられて考古学中心の編成となり、ケニアとウガンダにおいて遺跡調査が行われた。主に石器時代の遺跡が調査され、前期（Earlier Stone Age, ESA）・中期（Middle Stone Age, MSA）・後期（Later Stone Age, LSA）全ての石器時代がカバーされている。この調査の成果は、Omi (1977)の報告書として出版されている。

ESAではオロルゲサイリエ遺跡が1968年に続いて訪問されている。新たに訪問された遺跡の中で特筆に値するのがクービ・フォラ（Koobi Fora：図1b）である（Lg01-18）。クービ・フォラはケニア北部のトゥルカナ湖東岸に位置し、初期人類遺跡の調査地として有名である。そこで1968年から本格的に調査を始めたのが英国の古人類学者リチャード・リーキー（Richard Leakey）氏であるが、彼の写真もスライド資料に含まれており、発掘トレンチの写真もある。これらは、リーキー氏に遺跡案内してもらった際に撮影されたと考えられる（Omi, 1977）。この他、アシュール文化のキロンベ（Kilombe：図1g）遺跡を訪問した際の写真もある（Lg01-15）。ハンドアックスが散布する状況も撮影されている。キロンベ遺跡はOmi (1977)でも報告されている。

MSAとLSAの遺跡としては、プロスペクト・ファーム（Prospect Farm：図1j）が著名である。この遺跡が立地するエブル山（Mt. Eburru）一帯は黒曜石の産地であり、黒曜石製の石器がたくさん散布する状況が写真におさめられている（Lg01-15）（図6）。その際に撮影された写真が、調査報告書（Omi, 1977）の口絵写真として掲載されている。

この年に訪れた遺跡の一部は、後のシーズンも調査が継続された。そのような遺跡が、ケニアのムトングウェ（Mtongwe：図1q）遺跡（Lg01-16）、およびウガンダのルパ（Rupa：図1c）遺跡（Lg01-47）とムウェア北（Mweya North：図1l）遺跡である（Lg01-20）。この踏査で、ムトングウェ遺跡とルパ遺跡からはハンドアックスが採取されている（Omi, 1977）。

遺跡の写真以外では、ナイロビ博物館とウガンダ博物館において撮影された石器資料の写真が多く含まれている（Lg01-18～Lg01-20）。その注記には、“Smithfield”, “Nanyuki”, “Sangoan”, “Kombewa”, “Kafuan”, “Magosian” などが見られる。これらは、アフリカの石器文化や石器技術の名称、およびその指標となった遺跡名である。



図6. ケニア南部、プロスペクト・ファーム遺跡に散布する黒曜石の石器。黒曜石原産地に近い（Lg01-15収納の写真）。

3.3. ウガンダでの発掘とケニアでの遺跡測量—1978～79年

第3次のアフリカ考古学調査も「名古屋大学東アフリカ考古学調査隊」として編成され、1978年10月中旬から1979年2月中旬まで4か月間のあいだ、ウガンダとケニアにおいて調査が行われた。その際の写真記録が5冊のファイル（登録番号Lg01-23～27）にまとめられている。この調査の成果は、Omi (1980)の報告書として出版されており、安達（1979a-c, 1980a-d）の紀行文もある。

また、この調査に参加した赤澤 威氏（当時、国立科学博物館）がウガンダで撮影したとされる写真を含むファイルがあり（Lg01-28）、石器や土器、槍が撮影されている。また、このファイルには日本の津戸遺跡の調査を写したスライドも含まれている。同じフィルムで後に撮影されたため一緒に保管されたのかもしれない。

メインの調査地はウガンダにおける2遺跡（ムウェア北遺跡とルパ遺跡：図11,c）である（Omi, 1980）。両遺跡は前回の調査（1975年）で訪問され、石器資料の採取が行われた（Omi, 1977）。その結果として有望性が認められ、1978年に発掘が行われた。ムウェア北遺跡はウガンダの南西部に位置し、ルパ遺跡は反対に北東部に位置する（図11,c）。いずれもウガンダの考古局および博物館との共同調査という形で実施されており、調査車両の写真には“Uganda Japanese Archaeological Research”と書かれた文字が見える（Lg01-23）（図7）。

ルパ遺跡では、モロト（Moroto）市北部の道路沿いに3か所の発掘区（Localities A-C）が設けられた（Omi, 1980）。その発掘の様子を示す写真スライドがLg01-23のファイルにおさめられている。Locality AからはLSAの幾何学形細石器や背付き小石刃、小石刃石核などが発掘された（Omi, 1980）。その石器資料の写真がLg01-24に含まれている。

ムウェア北遺跡でも3つの地点で発掘調査が行われた。その際の地形測量や発掘作業、石器出土状況などの写真がLg01-24～27のファイルに収納されている（図8）。また、Lg01-25と26のファイルには、採集された石器自体の写真があり、ハン



図7. ウガンダで発掘資材を調査車両に積む様子。車のドアに“Uganda Japanese Archaeological Research”と書かれた文字が見える（Lg01-24収納の写真）。



図8. 名古屋大学が発掘調査したムウェア北遺跡（ウガンダ南西部）。数十万年前の原人が残した石器が発見された（Lg01-24収納の写真）。



図9. ハンドアックスとスクレーパー。名古屋大学が1978年にウガンダで発掘調査したムウェア北遺跡からの出土品（Lg01-25収納の写真）。

ドアックスやスクレーパー、球状石器などESAの石器が見られる（図9）。

ウガンダでの発掘調査の後は、ケニアに移動してムトングウェ遺跡（図1q）の測量調査が行われた。ムトングウェ遺跡も以前の1975年踏査でハンドアックスなどESAの示準的石器が採取されたために有望性が認められ、再調査に至った（Omi, 1977）。その際に撮影された遺跡の景観や地表面の石器の写真がある（Lg01-27）。

3.4. ケニアでの発掘とタンザニアでの踏査—1980年

大参氏によるアフリカ考古学調査としては4回目、「名古屋大学東アフリカ考古学調査隊」としては第3次の調査である。調査期間は1980年8月から10月の3か月間で、最初にケニアのムトングウェ遺跡（図1q）の発掘が行われ、その後タンザニアに移動し遺跡踏査が行われた（Omi, 1982:1p）。その際の写真記録が5冊のファイル（登録番号Lg01-29～33）にまとめられている。この調査の成果は、Omi (1982)の報告書として出版されている。

ケニアのムトングウェ遺跡は1975年の踏査と1978年の地形測量を経て、このシーズンから発掘調査が開始された。その際の記録として、遺跡景観や発掘区、発掘作業や休憩時間の様子、遺物の出土状況、土層断面などが撮影されているほか、調査隊の集合写真もある（Lg01-29, 30, 33）。発掘された石器資料の写真も多い（主にLg01-30～32）。

タンザニアの遺跡踏査の写真はLg01-32とLg01-33の2冊のファイルに収められている。スライドに注記がないので不確かであるが、撮影されている遺跡の景観や石器器種（ハンドアックスやクリーヴァー、多面体石器など）から判断すると、ムゴンガ遺跡だと思われる。この遺跡は1968年に初めて踏査され（Lg01-11）、今回が2度目の調査となる。その後、1986年と1989年にも調査が行われている（Omi, 1988, 1992）。

3.5. ケニアでの発掘とエチオピアでの踏査—1982年

大参氏が1981年に名古屋大学から信州大学へ異動したので、このシーズンからプロジェクト名称が変更した。「アフリカ東部と東北部の先史研究プロジェクト（East and Northeast African Prehistory Research Project）」と報告書には記されている（Omi, 1984）。この調査に伴う写真スライドのファイルには“SUAPR”と書かれている（表2）。Shinshu University African Prehistory Research（信州大学アフリカ先史研究）の略称だと思われる。

1982年の調査期間は8月から10月までの3か月間で、そのほとんどがケニアにおいてムトングウェ遺跡（図1q）の発掘調査や周辺の遺跡踏査が行われた。一方、短期間のあいだ、エチオピアへ移動してアワッシュ川流域の踏査も行われたようである（Omi, 1984:3p）。この写真記録が2冊（登録番号Lg01-34とLg01-35）のファイルにまとめられている。

ムトングウェ遺跡の調査記録としては、遺跡景観や発掘区、発掘作業の様子、遺物の出土状況、土層断面などが撮影されているほか、調査隊の集合写真もある（Lg01-34）（図10）。発掘された石器資料の写真には、幾何学形細石器や小石刃、小



図10. 1975年にケニア東岸で表面調査された遺跡の中から選ばれ、1980年代に7回の発掘が行われたムトングウェ遺跡（Lg01-36収納の写真）。



図11. ムトングウェ遺跡の第3石器インダストリーを特徴づける幾何学形細石器. 約5~4万年前にアフリカからユーラシアへ拡散したホモ・サピエンスの起源地の石器技術として現在, 国内外で再評価されている (Lg01-34収納の写真).

石刃石核などムトングウェ遺跡最上部の石器群 (第3インダストリーと呼ばれる) を特徴づける石器が数多くみられる (Lg01-34と35) (図11).

このシーズンにムトングウェ遺跡の調査を始める前に, オロルゲサイリエ遺跡 (図1n) が見学されたようである. その際の写真が幾つかある (Lg01-34).

エチオピア, アワッシュ川流域踏査の写真は少ない. スライドに注記されているのは, メルカ・クントゥレ遺跡 (Melka Kontoure: 図1a) のみである (Lg01-35). 注記はないが, このファイル後半の風景写真 (川を含む) がアワッシュ川流域と思われる.

3.6. ケニアでの発掘—1984年

このシーズンの調査は1984年8月10日から12月2日まで行われた. 10月3日まではケニアでムトングウェ遺跡 (図1q) の発掘と, 周辺の遺跡踏査が行われ, その後はエチオピアに移動して遺跡踏査が行われたと報告されている (Omi, 1986:3p). しかし, 調査報告書にはケニアでの調査成果しか掲載されておらず, 本資料の写真スライド (登録番号Lg01-36とLg01-37) にもエチオピア関連は見当たらない.

ムトングウェ遺跡の記録写真は, 発掘調査の様子や発掘区, 土層断面, 遺物出土状況, 石器資料である. ムトングウェが位置するモンバサ市周辺の踏査の様子と思われる写真もあるが (Lg01-37), 注記がないので具体的にどの場所かは不明である.

Lg01-37のファイル後半には40枚ほどの風景写真があるが, これも注記がないため場所が不確かである. しかし, 一部の写真に“Shetani lava flow”や“Kilimanjaro safari lodge”という掲示が見られるのでケニア・タンザニア国境あたりと思われる.

3.7. ケニアとタンザニアでの調査—1986年

このシーズンもケニアのムトングウェ遺跡 (図1q) の発掘が継続され, 7月~10月に実施された. タンザニアではムゴンガ遺跡とイシミラ遺跡 (図1w, x) の踏査が9月~10月に実施された. その成果が



図12. タンザニアの前期石器時代遺跡，ムゴンガ・マコロンゴニ．大参義一氏らが数回にわたり調査を行い，ハンドアックスなどの石器を報告した（Lg01-43収納の写真）．

Omi (1988)として出版されている．これらの調査の記録写真が，6冊のファイル（登録番号Lg01-38～43）にまとめられている．

5冊のファイル(Lg01-38～42)のほとんどは，ムトングウェ遺跡の発掘作業の様子や発掘区，土層断面，石器資料の写真である．それ以外は，ムトングウェ周辺で行われた遺跡踏査の記録がある．注記から遺跡名が分かるのが，ミピラニ（Mipirani：図1s）遺跡とヌグタツ（Ngutatu：図1r）遺跡である．どちらもMSAの石器資料が採取されており，特にヌグタツ遺跡ではムトングウェ遺跡と同様な幾何学形細石器が見つかったのが特筆に値する（Omi, 1988）．ケニア調査のその他の記録としては，ESAのオロルゲサイリエ遺跡とカリアンドウシ遺跡を見学した際の写真がある．

タンザニア調査の写真はLg01-42とLg01-43の2冊のファイルにおさめられている（図12）．そのほとんどがムゴンガ遺跡（図1w）の景観と石器の写真（ハンドアックスやクリーヴァー）である．

3.8. ケニアでの調査—1988年

ケニアでの調査は1988年にも継続され（9月～11月），ムトングウェ遺跡の発掘および周辺の遺跡踏査が実施された．その際の写真記録が1冊のファイル（登録番号Lg01-44）に収められている．スライドのほとんどに注記があるため，ムトングウェ遺跡で撮影された発掘区や土層断面，および周辺地域で踏査された遺跡との対応が分かる．1986年の写真記録にも残るミピラニ遺跡とヌグタツ遺跡の他に，キガト（Kigato：図1t）遺跡の景観やマバンダ・ヤ・ゴンベ（Mabanda ya Gombe：図1y）遺跡採取の石器の写真がある．全てMSA（ヌグタツはLSAも）の遺跡である．1988年の調査は，1989年の調査と合わせて報告書が刊行されている（Omi, 1991）．

3.9. ケニアとタンザニアでの調査—1989年

1989年の調査はケニアとタンザニアにおいて8月～9月に実施され，それが大参氏による最後のアフリカ調査となった．ケニアではムトングウェ遺跡の発掘とその周辺遺跡の踏査が継続された．Omi

(1991)の報告書によると、タンザニアでは主にムゴンガ遺跡(図1w)において調査が行われた。しかしながら、1989年調査の写真ファイル(登録番号Lg01-45, 46)には、ケニア調査の写真しか含まれていない。

ムトングウェ遺跡の調査風景や遺物出土状況、石器の写真がある。周辺遺跡では、マバンダ・ヤ・ゴンベ遺跡とミピラニ遺跡の景観、およびヌグタツ遺跡の石器資料が撮影されている。その他、発掘調査前に訪問したと思われるオロルゲサイリエ遺跡とカリアンドウシ遺跡の写真がある。

4. 本資料の意義

大参氏がアフリカ調査を始めるきっかけとなった名古屋大学アフリカ大地溝帯学術調査団(1968年)の研究テーマの1つが「人類文化の始原と展開の過程を考古学的に解明すること」であり、その後の大参氏のアフリカ調査にも引き継がれた。このように大きな研究テーマは今も色あせることはない。人類進化の主要な舞台であったアフリカでは、世界各国の人類学者・考古学者が石器時代の遺跡調査を行っており、そこで生まれる発見は日本でも大きな話題になる。しかし、日本人によるアフリカでの考古学調査はエジプトを除くと少ない(木村, 2001; 例外として諏訪ほか, 2017; 竹沢, 2014など)。その点で、9回におよぶ考古学調査がアフリカの、しかも化石人類・石器時代調査の中心ともいえるアフリカ東部において実施されたこと自体がまずは貴重であり、その記録写真となる本資料の価値を高めている。

またこれらの調査は、報告書が英語で出版されており、日本語の報告や解説文もある(表1)。そのため、写真スライドの経緯や撮影日時・場所が明らかであり、撮影内容もスライドの注記情報と合わせて考慮することで判断可能である。

撮影された対象も貴重なものが多い。オールドヴァイ渓谷やクービ・フォラは、人類の進化史や考古学の教科書でよく引用される著名な調査地であり、現在も最先端の研究が行われている(例えばRoach et al., 2016)。その調査を開始したリーキー一家のメアリー・リーキー氏とリチャード・リーキー氏に大参氏らが会った際の写真もある。その他、オロルゲサイリエ遺跡やイシミラ遺跡、カリアンドウシ遺跡(図1n, x, i)は、アフリカの原人が開発した人類最古の定型石器のハンドアックスやクリーヴァー(諏訪ほか, 2017)が数多く見つかったことで有名である。それらの石器が足の踏み場もないほどたくさん散布するアフリカならではの光景が写真にとらえられている。プロスペクト・ファーム遺跡(図1j)の写真は、東アフリカを特徴づける黒曜石原産地遺跡の様子を写す。この地域の黒曜石は、20万年以上も前に約150 kmも離れた場所へ(おそらく人づてに)運ばれていたといわれている(Blegen, 2017)。

そして、大参氏ら自身の遺跡調査の記録も貴重である。上記のイシミラ遺跡などと比較できるようなアシュール文化期の石器資料(ハンドアックスなど)がウガンダのムウエア北遺跡、タンザニアのムゴンガ遺跡(報告書ではムゴンガ・マコロongoニ遺跡)、ケニアのムトングウェ遺跡で発見されている。

また、それより後の時代(MSA~LSA)の石器資料(ルヴァロワ方式の石器、幾何学形細石器、小石刃など)が、ケニアのムトングウェ遺跡やその周辺地域から採取された。この時期の東アフリカは、ホモ・サピエンス集団が人口を増やし、やがてユーラシアへ拡散していくきっかけになった地域と考えられている(Tryon and Faith, 2016)。元々ユーラシアではネアンデルタールなどの旧人が居住しており、同時期の新人ホモ・サピエンスはアフリカの一部にとどまっていた。その後、なぜホモ・サピエンスはアフリカからユーラシアに居住を広げ、旧人の居住域にも侵入し、やがては旧人が絶滅してしまったのか、という人類進化史上の大きな研究課題がある。ホモ・サピエンスの行動様式に何か特別な点があったのか、という問題を探るために、その起源地であるアフリカのMSA~LSAの考古記録が注目を集めるようになってから既に久しい。その中で注目を集めている考古記録の1つが石器技術の変化である。特に、MSAに流行したルヴァロワ方式による石器製作から変化し、幾何学形細石器や小石刃が発達す

る過程とその行動的意義の問題が重視されている (Tryon and Faith, 2013, 2016). それは、幾何学形細石器や小石刃などの小型石器がホモ・サピエンス拡散の時期に増加する地域が、アフリカとユーラシアの両方で認められるからである (Mellars et al., 2013; Hublin, 2015; Tryon and Faith, 2013). その点において、ムトングウェ遺跡では、ルヴァロワ方式による石器技術から幾何学形細石器技術へ変化する過程が、石器群の層位的変化によって記録されており、とても貴重な記録である (この点の詳細は門脇, 2014を参照).

以上のような意義が認められる本資料は、過去の研究紹介のために利用できることはもちろん、今後の新たな研究や教育、考古学の一般普及に活用されていくことが望まれる。一例として、人類進化に伴う石器の変化を示す図として、高校の地学教科書に掲載されたことがある (木村ほか, 2017:72p).

写真スライドの一部は名古屋大学博物館ウェブサイトの「収蔵資料」ページ (<http://www.num.nagoya-u.ac.jp/data/omi.html>) において公開している。今後も写真スライドのリスト化とデジタル化を進める予定である。

引用文献

- 安達厚三 (1979a) 東アフリカ旧石器調査行 (1) 一 高原の町ナイロビ. 名古屋市博物館だより, **8**, 6.
- 安達厚三 (1979b) 東アフリカ旧石器調査行 (2) 二 大地溝帯の遺跡. 名古屋市博物館だより, **9**, 6.
- 安達厚三 (1979c) 東アフリカ旧石器調査行 (3) 三 ウガンダ入り—カンパラでの日々. 名古屋市博物館だより, **10**, 6.
- 安達厚三 (1980a) 東アフリカ旧石器調査行 (4) 四 カラモジャ・ルパ遺跡での発掘. 名古屋市博物館だより, **12**, 6.
- 安達厚三 (1980b) 東アフリカ旧石器調査行 (5) 五 カンパラでのクリスマス, 六 ルウエンゾリへ. 名古屋市博物館だより, **13**, 6.
- 安達厚三 (1980c) 東アフリカ旧石器調査行 (6) 七 ルウエンゾリ国立公園内の遺跡, 八 ムウエア遺跡の発掘. 名古屋市博物館だより, **14**, 6.
- 安達厚三 (1980d) 東アフリカ旧石器調査行 (7) 九 ウガンダ博物館, 十 ふたたびケニアへ. 名古屋市博物館だより, **15**, 6.
- Blegen, N. (2017) The earliest long-distance obsidian transport: Evidence from the ~200 ka Middle Stone Age Sibilo School Road Site, Baringo, Kenya. *Journal of Human Evolution*, **103**, 1–19.
- 波多野和夫 (1996) 大参義一教授追悼. 愛知学院大学文学部紀要, **26**, 87–94.
- Hublin, J.-J. (2015) The modern human colonization of western Eurasia: when and where? *Quaternary Science Review*, **118**, 194–210.
- 門脇誠二 (2014) ホモ・サピエンスの起源とアフリカの石器時代—ムトングウェ遺跡の再評価. 名古屋大学博物館, 70p.
- 加藤安信 (2006) アフリカの日々. いちのみや考古, **20**, 45–50.
- 木村龍治・吉岡一男・縣 秀彦・井出 哲・大路樹生・大山智輝・加藤昌典・田近英一・田中義洋・坪田幸政・饒村 曜・林 慶一・半田 孝・半田利弘・前川寛和・宮嶋 敏・吉川 真・米澤正弘・東京書籍株式会社 (2017) 改訂 地学基礎, 東京書籍株式会社, 200p.
- 木村有紀 (2001) アフリカにおける考古学研究の回顧と展望. *アフリカ研究*, **59**, 7–10.
- Mellars, P., Gori, K. C., Carr, M., Soares, P. A., and Richards, M. B. (2013) Genetic and archaeological perspectives on the initial modern human colonization of southern Asia. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, **110**, 10699–10704.
- Omi, G. (1969) The Palaeolithic site of Mgonga, Iringa District, Tanzania. *Journal of Earth Sciences, Nagoya University*, **17**, 189–196.
- 大参義一 (1976) 東アフリカ紀行. *考古学ジャーナル*, **125**, 2–5.
- Omi, G. (1977) *Third Preliminary Report of African Studies (Archaeology I)*. Association of African Studies, Nagoya

- University, 61p.
- Omi, G. (1980) *Fifth Preliminary Report of African Studies (Archaeology 2)*. Association of African Studies, Nagoya University, 97p.
- 大参義一 (1981) ケニア国ムトングウェ遺跡調査の概要. *アフリカ研究*, **20**, 124–129.
- Omi, G. (1982) *Mtongwe 1980: Seventh Preliminary Report of African Studies (Archaeology 3)*. Association of African Studies, Nagoya University, 130p.
- Omi, G. (1984) *Mtongwe 1982: An Interim Report of the East and Northeast African Prehistory Research Project 1982*. Shinshu University, 157p.
- 大参義一 (1984) アフリカ研究の回顧と展望－考古学. *アフリカ研究*, **25**, 107–113.
- Omi, G. (1986) *Mtongwe 1984: An Interim Report of the East and Northeast African Prehistory Research Project 1984*. Shinshu University, 80p.
- Omi, G. (1988) *Mtongwe and Mgonga: An Interim Report of the East and Northeast African Prehistory Research Project 1986*. Shinshu University, 163p.
- Omi, G. (1991) *An Interim Report of the East and Northeast African Prehistory Research Project 1988 and 1989*. Shinshu University, 191p.
- 大参義一 (1991) ケニア海岸部の旧石器時代遺跡調査－ムトングウェ遺跡の場合. *信大史学*, **16**, 1–20.
- 大参義一 (1992) ケニア国ヌグタツ遺跡の旧石器について. *人間文化*, **7**, 37–57.
- Roach, N. T., Hatala, K. G., Ostrofsky, K. R., Villmoare, B., Reeves, J. S., Du, A., Braun, D. R., Harris, J. W. K., Behrensmeyer, A. K., and Richmond, B. G. (2016) Pleistocene footprints show intensive use of lake margin habitats by *Homo erectus* groups. *Scientific Reports*, **6**, 26374.
- 諏訪 元・ヨナスベイエネ・佐野勝宏・ブルハニアスファオ (2017) アシユール石器文化の草創: エチオピア, コンソ. 東京大学出版会, 120p.
- 竹沢尚一郎 (2014) *西アフリカの王国を掘る－文化人類学から考古学へ*. 臨川書店, 208p.
- Tryon, C. A. and Faith, J. T. (2013) Variability in the Middle Stone Age of Eastern Africa. *Current Anthropology*, **54** (Supplement, **8**), S234–S254.
- Tryon, C. A. and Faith, J. T. (2016) A demographic perspective on the Middle to Later Stone Age transition from Nasera rockshelter, Tanzania. *Philosophical Transactions of the Royal Society B*, **371**, 20150238.
- 吉田英一・佐々木重洋・寺田 騰・浅沼修一・榎原大悟・桂田祐介 (2009) 第12回名古屋大学博物館特別展記録「大陸アフリカ－名大の研究軌跡－」. *名古屋大学博物館報告*, **25**, 183–200.